

【1】雨安居地伝承の概観

〔1〕雨安居地伝承に対する研究者の態度には、今まで相反する2つの立場がある⁽¹⁾。ひとつは雨安居地伝承が南伝と北伝の両方に相似した形で見出されるため、この起源が部派分裂以前の古くに遡ると見て、この伝承に多少依拠するというものである⁽²⁾。もうひとつはこの伝承の記述が原始仏教聖典中になく、パーリの註釈書類や『僧伽羅刹所集経』といった後世に成立した文献になってはじめて現れることから、古い伝承とは考えられないという理由で、この伝承をまったく取るに足らないとするものである⁽³⁾。

この雨安居地伝承が依拠するに値するものか否か、資料的価値を確定するために我々が注目したのは、原始仏教聖典中に見出される釈尊の雨安居についての記述である。ニカーヤと阿含そして律において、釈尊の所在が示される際に、その時そこで釈尊が雨安居に入っていたことが示されることがある（これを以下に「釈尊雨安居記事」と呼ぶ）。もし雨安居地伝承が古くに成立し、原始仏教聖典に並ぶ重要な伝承であるならば、聖典がこれを無視するはずはなく、たとい聖典がこの伝承にリストの形で言及せずとも、内容的に原始仏教聖典の釈尊雨安居記事と雨安居地伝承との間に調和が見られるはずである。原始仏教聖典と雨安居地伝承が齟齬する要素を有するならば、原始仏教聖典以上に信頼できる資料をわれわれは有していないのであるから、雨安居地伝承に基づいて釈尊伝を再構成することは適当ではないと結論できる。

- (1) 以下に述べる2つの立場については前田恵學著『原始仏教聖典の成立史研究』山喜房仏書林、1964年、pp.69～71に紹介がある。
- (2) 水野弘元著『釈尊の生涯』（春秋社 新装1985年）p.314、中村元著『ゴータマ・ブッダ I』中村元選集〔決定版〕第11巻（春秋社 1992年）p.535以下の記述も、特に否定的な見解は述べられていない。
- (3) 古いところではH. オルデンベルクが *Buddha, Sein Leben, Seine Lehre, Seine Gemeinde, Berlin, 1881* (p.82 註1) で「ブッダが成道後の第6, 7, 8・・・年に、何を語り、何を行ったかを説く大きなリストが成立した（例えばピガンデーの伝）。これらの後世の成立になるリストが全く無価値であることは、聖典が年次について完全に沈黙を守っていることから明らかである」と述べている。

〔2〕雨安居地伝承にはいくつかのヴァリエーションがあり、大きくは2種類に分類できる⁽¹⁾。ひとつは釈尊の成道後から入滅までの45回の雨安居を、「釈尊は成道後第1年の雨安居をバーラーナシーにおいて、第2年の雨安居を王舎城において……過ぎされた」として編年史的に地名とその年次を伝えるものであり、もうひとつは「釈尊は舎衛城において23回の雨安居を、王舎城において5回の雨安居を……過ぎされた」として順不同で各地における雨安居の回数のみを伝えるものである。

- (1) 以下の詳細は【論文5】「原始仏教聖典資料に記された釈尊の雨安居地と後世の雨安居地伝承」『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』第6号（中央学術研究所 2002年）pp.53～128

〔2-1〕年次の情報を伝えるものは、南伝ではパーリのアッタカタの *AN.-A. (Manorathapūraṇī)* と *Buddhavamsa-aṭṭhakathā (Madhurattthavilāsini)* がある。これとほぼ同じものが、19世紀に著された書物であるが、ビルマに伝わる伝承である P. Bigandet の *The Life or Legend of Gaudama* とスリランカの伝承によってまとめられた R. Spence

Hardy の *A Manual of Buddhism* 中にも紹介されている⁽¹⁾。AN-A と *Buddhavaṃsa-aṭṭhakathā* は全く同じ伝承を伝え、Bigandet と Hardy が伝えるものはそれらといくらか異なっているが、ソースが異なるとは考えにくい。同じ伝承からの垂流であろう。異同が生じた由来については不明であるが、アッタカターの情報が誤って伝わったものかもしれない。

北伝では『僧伽羅刹所集経』が年次を伝える伝承である。アッタカターの伝承との間に異同があるものの、共通する部分が多く、南伝と北伝の雨安居地伝承が無関係に成立したのではないことを示している。

『十二遊経』も年次を伝えるものであるが、成道後の 12 年間の釈尊の事績を伝えるのみである。雨安居地伝承に類するものと考えられるが、他の伝承と内容に類似がほとんど見られず系統を異にするものである⁽²⁾。

本論末に付表 1 として諸雨安居地伝承の対照表を挙げるので参照されたい。

- (1) 【論文 5】の執筆後、雨安居地リストを挙げる資料として新たに *Jinakālamāli* と *Paṭhamasambodhi* の伝承を見出した。*Jinakālamāli* (ed. by A. P. Buddhadatta, PTS, 1962, pp.30~35) のものは第 13 年と第 18 年の Cāliya 山を Pāliya 山と綴ることを無視すれば、第 19 年を除いて AN-A と *Buddhavaṃsa-aṭṭhakathā* のものと一致している。*Paṭhamasambodhi* (ed. by George Coedès, edition prepared by Jacqueline Filliozat, PTS, Oxford, 2003, pp. 231~233) のものはもっと大きく異なっている（詳細は本論末の付表 1 を参照のこと）が、*Jinakālamāli* は 1516/1517 の成立であり、*Paṭhamasambodhi* の当該個所は恐らくもっと新しいため、後世の垂流とみなして本論ではこの両者を扱わない。なお *Paṭhamasambodhi* の当該個所の詳細については 2009 年 3 月発刊の岩井昌悟「*Paṭhamasambodhi* 第 14 章 Parinibbāna-kathā 訳注研究（1）」（『東洋学論叢』東洋大学文学部紀要第 62 集インド哲学科篇 XX XIV 所収）を参照されたい。

- (2) これについては【論文 7】「『仏説十二遊経』の仏伝伝承——成道後 12 年間の雨安居地を中心にして」『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』第 7 号（中央学術研究所 2003 年）pp.119~155 を参照されたい。

[2-2] 回数を伝えるものには、南伝では *Dhammapada-A* が舎衛城における雨安居を 25 回（祇園 19 回、東園 6 回）、カピラヴァットゥにおける雨安居を 1 回とする。これは年次を伝えるアッタカターの情報と比較した場合、雨安居の回数に着眼すれば、齟齬するものではない。

北伝では『八大霊塔名号経』と『プトン仏教史』がある。この両伝承は源泉を同じくする⁽¹⁾。

年次を伝える伝承と回数を伝える伝承とで、挙がる地名はほぼ一致しているため⁽²⁾、年次を伝えるものと回数を伝えるものとが無関係に成立したとは考えられない。

ところで、もし回数のみを伝える伝承が年次を伝える伝承に先行して成立し、後に年次に恣意的に並べられたとするならば、つまり年次についてこの伝承は単なる創作であるとすれば、雨安居地伝承の資料的価値が著しく減少する。特にアッタカターの年次を伝える伝承において、成道後第 21 年以降、『僧伽羅刹所集経』においては成道後第 26 年以降、成道後第 44 年までが全て舎衛城とされていることは、そのような操作の結果とも見られなくもない。しかしながら、文献の成立年代から考えるならば、年次の伝承を有する『僧伽羅刹所集経』の成立が、作者僧伽羅刹の生存年代から 1~2 世紀ごろとされるのに対し、回数の伝承を記す宋の法賢訳『八大霊塔名号経』や 1322 年に書かれた『プトンの仏教史』は、それよりも

後代の成立である。断定は避けるべきではあるが、年次の伝承は回数 of 伝承に先行すると思われる。回数 of 伝承は記憶を助けるためのもので、年次伝承を土台にしていると考えるのが自然と思われるからである (3)。

(1) 【論文5】「原始仏教聖典資料に記された釈尊の雨安居地と後世の雨安居地伝承」『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』第6号（中央学術研究所 2002年）p.065

(2) 同上、p.073

(3) ただし年次の伝承と回数 of 伝承の先後について、参考までにジャイナ教の開祖マハーヴィーラの雨安居 (cātur-māsa) 地伝承では結論が逆になることを付言する。*Kalpasūtra* (SBE. vol. X XII p.264) は、マハーヴィーラの出家後第42年までの雨安居を、「マハーヴィーラは最初の雨期を Asthikagrāma で、3つの雨期を Campā と Pṛṣṭhacampā で、12の雨期を Vaiśālī と Vāṇijyagrāma で、14の雨期を Rājagṛha と Nālandā の近郊で、6の雨期を Mithilā で、2雨期を Bhadrīkā で、Ālabhikā, Paṇitabhūmi (Rāḍha-deśa) ?, 舎衛城で一回ずつ、最後の雨期をパーパー (パーヴァー) のハスティパーラ王の高官の公邸で過ごした (In that period, in that age the Venerable Ascetic Mahāvāra stayed the first rainy season in Asthikagrāma, three rainy seasons in Campā and Pṛṣṭhacampā, twelve in Vaiśālī and Vāṇijyagrāma, fourteen in Rājagṛha and the suburb of Nālandā, six in Mithilā, two in Bhadrīkā, one in Ālabhikā, one in Paṇitabhūmi one in Śrāvastī, one in the town of Pāpā in king Hastipāla's office of the writers: that was his very last rainy season. (122)) 」と、42回の雨安居の内訳を伝える。最初と最後の雨安居を除いて、回数のみを伝える伝承になっている。

ところが、*Kalpasūtra* よりも後代の伝承において、年次の伝承が現れる。Muṇi Ratna-Prabha Vijaya 著 *Śramaṇa Bhagavān Mahāvīra, His Life and Teaching* の vol. II (part I, II) はマハーヴィーラの編年記体の詳細な伝記であり、釈尊について Bigandet の伝えるものと同様の形で、第何年の雨安居をマハーヴィーラが何処で過ごしたかが逐一記されている。これは20世紀の中頃に英語で執筆された書であるが、用いられている資料はもっと古くに遡るものであろう。これに従ってマハーヴィーラの42回の雨安居を整理すれば以下のようになる (Muṇi Ratna-Prabha Vijaya, *Śramaṇa Bhagavān Mahāvīra, His Life and Teaching*. Delhi 1948~1950. なお Nand Kishore Prasad, *Studies in Buddhist and Jaina Monachism*, Bihar 1972, pp. 177~178 に一覧があり、脚注に Pt. Kalyan Vigayaji, *Śramaṇa Bhagavāna Mahāvīra, Prastāvanā* が参考にあげられているが、この書と Muṇi Ratna-Prabha Vijaya の書の関係は不明である)。

釈尊雨安居地伝承の検証

<i>Kalpasūtra</i>	<i>Śramaṇa Bhagavān Mahāvīra</i>
Asthikagrāma (1回)	第1年
Campā と Prṣṭhacampā (3回)	Campā 第3, 12年 (2回) Prṣṭhacampā 第4年 (1回)
Vaiśālī と Vāṇijyagrāma (in Videhadeśa) (12回)	Vaiśālī 第11, 14, 20, 31, 32, 35年 (6回) Vāṇijyagrāma 第15, 17, 21, 23, 28, 30年 (6回)
Rājagṛha と Nālandā の近郊 (14回)	Nālandā 第2, 34, 38年 (3回) Rājagṛha 第8, 13, 16, 18, 19, 22, 24, 29, 33, 37, 41年 (11回)
Mithilā (6回)	第25, 26, 27, 36, 39, 40年 (6回)
Bhadrikā (2回)	Bhaddila 第5年 (1回) Bhadrikā 第6年 (1回) ※ <i>Kalpasūtra</i> では Bhaddila が Bhadrikā と同一の地 と見なされているのであろう。
Ālambhikā (1回)	第7年 (1回)
Paṇitabhūmi? Rādha-deśa? (1回)	第9年 (1回)
舎衛城 (1回)	第10年 (1回)
パーパー (1回)	第42年 (1回)